廃屋

青い電線に枯れた蔓草
錆びたトタンに覆われて
割れたガラスから中を覗けば
何だか生活の匂いがする
自由気ままに茂る草の中に
きっとこの家の主に愛されていたであろう
赤や黄色の雛菊が咲き
僕はそっとその香りに口づける
貴族のように儚げなその庭には
陽光が斜めに射すのです
山吹色の縁取りに
花はひときわ輝いて哀しみに
ようやくのことに語り始めてくれるのです
「それはそれは温もりに満ちておりまして
目刺しが焼ける青い煙やら
どたばた駆ける子供やら
新聞を縁側に広げる主やら
坊ちゃんの入学の日には
私と一緒に写真など撮りまして
何故と申しまするにその日は
『雛菊が咲いた、雛菊が咲いた』と皆で…」
そっと茎を震わせて
儚い陽光は傾いて
僕は感じていたのです
誰そ彼れ時の花の淋しさを
僕は寄り添ってみたのです

それぞれの生活（くらし）というものに

(1985.1.12)